

JIS G 1201 (鉄及び鋼—分析方法通則) :2022 正誤表

(別紙様式)

規格の訂正

1. 訂正の内容

JIS G 1201		規格名称：鉄及び鋼—分析方法通則	
区分	位置	誤	正
本体	7.2 a) 3.1) 式(1)	$C = \sqrt{\frac{s_C^2}{N_C} + s_R^2}$	$C = 2 \sqrt{\frac{s_C^2}{N_C} + s_R^2}$

2. 誤りが判明した経緯

外部から、「今回の改正で、対標準物質許容差を規定する式の係数 (=2) がなぜ変更されたのか」との問い合わせがあり判明しました。

3. 発行が必要な理由

⑤ その他 (具体的に説明)

式(1)から算出される対標準物質許容差 (C) が誤りとなるため。

4. 誤りが生じた原因及びその除去の為の対応

① 誤字、脱字

旧版 (JIS G 1201 : 2014) の規定のまま、本来変更をしない箇所ですが、式の添え字の字体を修正する過程で、「2」の記載を誤って削除してしまいました。

許容差は、ある明記された条件 (併行条件、中間精度条件、室間再現条件など) の下で「得た二つの測定結果の差の絶対値 (=偶然誤差) が、その値以下になることが 95 %の確率で期待される値」と、と規定されています [JIS Z 8402-1 (測定方法及び測定結果の精確さ (真度及び精度) — 第 1 部 : 一般的な定義及び原理)]。

対標準物質許容差においては、認証値決定時の分析値の標準偏差が偶然誤差に相当し、式 (i) で表されます。この出現頻度の分布を示す正規分布において 95 %の確率を表す区間は、標準値 $\pm 1.96\sigma$ です。この 1.96 を丸めた 2 が、式 (i) に対する係数となり、対標準物質許容差は式 (ii) で表されます。

$$\sqrt{\frac{s_C^2}{N_C} + s_R^2} \dots\dots\dots (i)$$

$$2 \sqrt{\frac{s_C^2}{N_C} + s_R^2} \dots\dots\dots (ii)$$

金属材料及び鉱石類の分析方法規格における対標準物質許容差は、いずれも「使用した標準物質の認証値を決定したときの標準偏差の2倍」と規定しています。

規格番号	規格名称	記載位置
JIS G 1301	フェロアロイ－分析方法通則	7.2.1 b) 1)
JIS G 1253	鉄及び鋼－スパーク放電発光分光分析方法	表 8, 表 9
JIS H 1270	ニッケル及びニッケル合金－分析用試料採取方法及び分析方法通則	8.2 1)
JIS M 8202	鉄鉱石－分析方法通則	6.4.1 d) 1)
JIS M 8203	マンガン鉱石－分析方法通則	7.2.1 b) 1)
JIS M 8205	鉄鉱石－蛍光X線分析方法	9.2
JIS M 8261	クロム鉱石－分析方法通則	7.2.1 b) 1)

今後、申出前に三者委員会以降の変更点が申出原稿に反映されていることを複数で確認するとともに、修正前後のファイルを Word の比較機能を使用して変更点を明確にし、誤記がないことを確認することにより、再発を防止して参ります。

備考 1. 1 規格 1 起票とする。

備考 2. 正誤が書ききれないときは、別紙を添付する。